

2 高齢者の糖尿病性昏睡の2例

一高浸透圧性非ケトン性とケトアシドーシス性昏睡一

茨木麻衣子・宮腰 将史・鴨井 久司
金子 兼二

長岡赤十字病院糖尿病センター

高齢者の糖尿病性昏睡の2例を経験した。症例1は83歳の男性で、感染症と脱水を契機に高浸透圧性非ケトン性昏睡(HONK)を発症した。もともと寝たきりの状態であり、意識レベルもJCS 300まで低下していたが、元の状態まで回復した。HONKは一般に予後不良だが、適切な血糖コントロールと輸液管理により、元の状態まで回復したと考えた。症例2は71歳の女性で、インスリンを中止したためにケトアシドーシス性昏睡(DKA)を発症した。以前は2型糖尿病と診断されていたが、今回の入院時は尿中CPR $0.4 \mu\text{g/day}$ 、抗GAD抗体陽性であり、1型糖尿病であった。DKAは一般に若年者に多いが、本例では高齢になってから1型糖尿病を発症したために、高齢でありながらDKAを発症したと考えた。高齢者の糖尿病性昏睡も病態を的確に把握し、適切な治療を行うことで、より良い予後を得ることができることを示す2症例であった。

3 糖尿病患者における食後高脂血症治療の意義(第3報)一フェノフィブラートの功罪一

中村 宏志***・中村 隆志***

中村医院内科*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

器官制御医学講座内科学専攻**

新潟薬科大学薬理学教室***

【目的】近年、食後高脂血症(高TG血症)が動脈硬化危険因子として注目されている。この治療に用いられるフェノフィブラートとベザフィブラートを比較して利点と欠点について検討した。

【対象と方法】当院に通院中の食後高TG血症合併の2型糖尿病患者27例(ベザフィブラート400mg服用中)を対象に、3ヶ月間ベザフィブラートをフェノフィブラート300mgに変更投与し、

1ヶ月毎にTC, HDL-C, TG, LDL-C, GOT, GPT, γ -GTP, CPK, 血糖, HbA1cを測定した。

【結果】TC, LDL-C, TGはフェノフィブラートの投与により有意($p < 0.05$)に減少, HDL-Cは有意($p < 0.05$)に増加した。GOT, GPT, γ -GTPはフェノフィブラートの投与により有意($p < 0.01$)に増加した。GOT, GPTが100U/l以上に上昇する例も20%認めた。HbA1cはフェノフィブラート投与により有意($p < 0.05$)に増加した。

【結論】フェノフィブラートのLDL-C低下作用はベザフィブラートより強力であると思われるが、GOT, GPTが急激に増加することがあり、慎重に用いるべきと思われる。

4 小児肥満における高感度CRPと血圧、脂質代謝との関連

樋浦 誠・菊池 透・長崎 啓祐
内山 聖

新潟大学大学院医歯学総合研究科
内部環境医学講座小児科学分野

【目的】小児肥満での慢性炎症の存在およびその危険因子を明らかにするために、高感度CRP、脂質代謝、血圧の関連を検討した。

【方法】男児144名(平均11.2歳)が対象。血圧、高感度CRP、血清脂質を測定した。肥満群と非肥満群の2群で高感度CRP、血圧、血清脂質を比較し、対象全体で肥満度、血中脂質、血圧と高感度CRPとの関連を単回帰分析および重回帰分析で検討した。

【成績】肥満群は非肥満群に比べ高感度CRP、血圧が高値で脂質代謝異常も進展していた。高感度CRPと肥満度、血圧、脈圧、LDL-C、アポB, E, LDL-C/HDL-Cは正の相関があり、HDL-Cとは負の相関があった。肥満度が最も強く高感度CRPに影響を与えていた。

【結論】小児肥満において高感度CRPと血圧、脂質代謝との関連が認められた。小児肥満ではすでに血圧、高感度CRPが高く、慢性炎症や脂質代謝異常が存在し、進行していることが示唆された。